

プレス空知 5月 深井尚子

今、北海道は一斉にお花が咲き、一気に春爛漫になっていますが、北海道の気候は、ヨーロッパにとってもよく似ています。5月は、ヨーロッパも同じように春の訪れを喜びます。ローベルト・シューマン（1810～1856）は、連作歌曲集「詩人の恋」の第1曲目に、「美しい5月に」という曲を書きました。素晴らしく美しい5月に、恋が始まる・・・という内容で、この季節にぴったりの作品ではないでしょうか。シューマンが30歳のころ、苦難を乗り越えて愛する人と結婚できた時期に、作曲されました。「詩人の恋」は、ハイネの詩による16曲の連作歌曲で、シューマンは、インスピレーションに導かれて、あっという間に書き上げたといわれています。

シューマンは、ロマン派を代表する作曲家で、ベートーヴェンの強い影響を受けながら、叙情的で自由な形式の作品を数多く生み出しました。皆さんは、トロイメライなどご存知ではないかと思います。ロマン派の音楽は、文学と深く関わりがありますが、特にシューマンは、父親が書店を営んでいたこともあり、若いころから文学に親しみ、詩、言葉、文字からの印象を音楽にした作曲家です。形式を重視する古典派の時代のあと、自由な感情表現を謳歌したロマン派は、文学においても花開きました。しかし、文学は、言葉によって直接的な表現をすることに対して、音楽は、言葉が無く音によって表現するため、観念的で、文学より高級な芸術として発展していきました。そのような社会情勢の中、シューマンは、自ら音楽新聞の編集に携わり、立法学者に対抗する、架空の“ダヴィッド同盟”を作り、その紙面において仮名で持論を展開していました。

「詩人の恋」は、ハイネの詩に音楽をつけたもので、当時のハイネ（1797～1856）は、たくさんの抒情詩を書いています。シューマンは、過去の芸術家より同世代の芸術家の作品も率先して読み、その心情や表現に傾倒しました。詩人の恋には、第一曲のほかに、「僕のあふれる涙から」、「バラに百合に鳩に太陽」、「僕は夢の中で泣いた」などのタイトルがあり、恋する真情をまっすぐに綴ったハイネの詩に、美しいピアノ伴奏が書かれています。シューマンは、ピアニストを目指して20歳でピアノの名教師に師事しますが、無理な練習のせいで、指を故障しピアニストの道を断念しました。その後、作曲に転じ、シューマン独特の、複雑でありながら美しいメロディ、多彩なハーモニーでロマン派の代表的な作曲家となりました。その名教師の娘である天才ピアニスト、クララ・ヴィークと結婚し、たくさんの子どもに恵まれ、生涯、仲良く連れ添いました。しかし、シューマンは、精神を病むようになり、ライン川に投身自殺しますが救出され、晩年は精神病院で暮らし、その生涯を閉じます。「詩人の恋」を聴くと、シューマンの繊細で真面目な性格をうかがわせるメロディやピアノ伴奏部分の不思議な和声進行で、シューマンの音楽の世界に浸ることができます。「美しい5月に」の歌詞は、「素晴らしく美しい5月に、すべてのつぼみがはじけていたころ、僕の心の中に愛が生まれた。すべての鳥が歌っていたころ、僕は彼女に告白した。僕の憧れと熱い思いを」というもので、この情景は、私たち北海道に住むものが実感として同じ感覚を持つことができるのではないのでしょうか。